黒を白と言い切る怖さ

山口　洋司

黒を白と言い切る。

桂米朝師の落語 18 番に「鹿政談」という一席があります。

奈良の豆腐屋がおからを食べにきた鹿をあやまって犬と間違え殺してしまう。奈良では鹿は聖獣、殺すと死罪になる。さっそく豆腐屋は役所に届け出るのですが奉行は正直者で勤勉な豆腐屋をなんとか救ってやりたいと白州の裁きで、〈この遺骸は鹿でない、犬である〉、と言うと、居並ぶ与力たちも〈犬である〉と奉行に合わせて口を揃えます。

ところが鹿の守役ひとりだけが〈鹿である〉、と異議をとなえる。すると奉行はお前は日頃、お上から支給されるエサ代を横領している、と切り返します。弱いところをつかれた鹿守はあわてて〈犬である〉と豹変。

間違いを分かっていても、黒を白と言い切る奉行に皆が同調していくさま、米朝さんは人間のおろかさ、哀しさを淡々と演じます。

昨年たまたま NHK の「日本の話芸」を見ていたら、笑福亭鶴光がこの「鹿政談」をいかにも鶴光らしく空気を読む同調と横領をより今の世相によりそってカルカチャライズして米朝さんとは違った爆笑ものに仕立てあげていました。

似たような話。トランプ大統領が突然メキシコ湾をアメリカ湾にすると言い出せば、周りは不条理なことと分かっていてもアメリカ湾にしてしまう。他のメディアは同調してしまうのですがAP通信だけは同調せずメキシコ湾で通すと大統領がの記者会見から排除されたのは記憶に新しいところです。

森友問題でも安倍さんの〈私や妻が関与していたら議員を辞める〉と言ったことから財務省みんなが揃って黒を白と言い、公文書まで改竄、ひとりの命が失われる始末でした。

間違いと分かっていても権力者に同調、忖度する。黒を白にしてしまう一　悲しいかな江戸時代からの古典落語に描かれ笑いとばされた世界が今、まさに生き生きと生き続けているのです。

権力が思いを強行するための、黒を白、白を黒、これぞ民主主義を腐敗させていく大きな要因です。

今回の財務省の公文書改竄にあたりまえのこととして、ひとり立ち向かう赤木雅子さんのような勇気と見識のある人がひとりでも増えていったら社会が変わっていくのではないでしょうか。